=市史編さん便り=　【22 号】 令和 4 年 7 月 15 日（金）発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

黒潮とともに生きる！　-漁師が生まれる大地の物語-

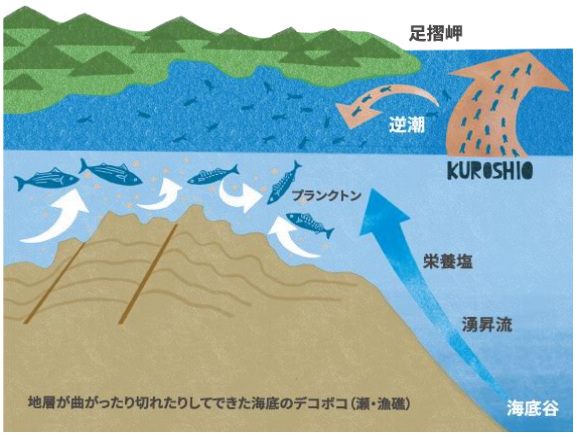
『新市史』第 13 章「地勢・地質」について、そのトピックを紹介します。この記述ついては、国立公園＊ジオパーク推進課の土井恵治専門員、島根県立三瓶自然館の今井悟研究員の記述した『日本ジオパーク認定申請書(2021)』の地質に関わる箇所から抜粋したものです。海と大地と地形によって形成されてきた「土佐清水の風土」を知り、これを守っていくことは市民にとって極めて重要なことだと思います。

＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊　　＊

土佐清水市は、かつては遠洋漁業のカツオ船が在籍していた「漁業の街」である。ではなぜ土佐清水市で漁業が発展したのだろうか。それは近海に優れた漁場が存在しているからである。この背景には、黒潮と大地が大きく関係している。両者が出会うことで、生態系、海流、多様な海と共に生きる暮らし、文化が育まれてきた。平地の少ない土佐清水、特に足摺半島地域では、小高い場所にある平坦地である「駄場（ダバ）」が居住地や農耕地として利用されてきた。「駄場」の大部分は海成段丘であり、地震隆起と気候変動にともなう海水準変動によって形成された地形である。つまり、人々の暮らしの根幹にある大地にも海との相互作用が強い影響を与えているのである。

そして、この土佐清水の海を特徴づけるのが「黒潮」である。この地では，黒潮が大地と出会うことで、生態系、海流、多様な海と共に生きる暮らし、文化が育まれてきた。たとえば，長い歴史を有する日本の出汁文化を支えてきた、鰹節や宗田節をはじめとする漁業文化はその好例である。江戸時代の土佐清水は、全国でも屈指の品質を誇る鰹節の産地として知られていた。その技術が現代に引き継がれているのが宗田節である。この節作り文化が発展した要因は、大きく二つある。一つは近海にある優れた漁場である。黒潮が土佐清水に接近すると、陸棚斜面を駆け上がる湧昇流が生じて太陽光が届く海面付近に豊かな栄養塩を運び、土佐清水近海に好漁場が形成される。

二つ目は、海路の存在である。黒潮が足摺岬、室戸岬、紀伊半島といった太平洋に突き出す岬にぶつかると、逆潮（反転流）と呼ばれる岸に沿って西方向に流れる海流が生じる。鰹漁や鰹節作りの先進地であった紀伊半島の漁師がこれらの海流を利用して足摺半島近海へ進出、鰹の好漁場を発見し、また節作りの製法を伝えた。このことが、土佐清水の漁業に大きな発展をもたらすことになった。また黒潮や逆潮は太平洋での航海にも利用され廻船業が発達することとなり、さらに内陸部でも、節を燻すのに用いる薪（ボサ）や、輸出用の木炭の生産のため、林業が営まれていた。



左図：黒潮の反転流　右図：海底地形と漁場の形成（土佐清水ジオパーク推進協議会作成）

近年では、ゴマサバ（ブランド名：土佐の清水さば）が新たな特産品となっている。回遊魚であるゴマサバは、黒潮流域で生まれ、夏の間は北上して三陸や北海道沖で成長し、冬～春になると産卵のために南下する。足摺半島沖はゴマサバの産卵海域であり、また成長して回遊しなくなった“瀬付きのサバ”の生息地でもある。足摺半島沖の海底は、大地の隆起にともなって形成された断層や褶曲が数多く存在し、起伏にとんだ海底地形となっている。この地形が漁礁の役割をすることで、年中ゴマサバが漁獲できる好漁場となっている。

さらに、土佐清水では、三崎層群が分布する竜串・見残し海岸において、波や海水中の塩による風化侵食作用によって奇勝奇岩が生み出され、江戸時代前期の遍路案内書に紹介されて以降、観光名所として知られるようになった。さらに、風化侵食作用によって複雑な地形となっている竜串湾に暖かい黒潮が流れ込むことで、サンゴ類をはじめとする生物多様性の高い海域が形成され、ダイビングやグラスボート、そして、“里海”たる竜串湾の生物を中心に紹介する水族館などを楽しむため多くの人が訪れることとなった。

しかし、大地と海との関係は、良いことばかりではない。土佐清水のすぐ沖に存在する南海トラフで発生する大地震とそれにともなう大津波は、土佐清水に大きな被害を幾度も与えてきた。また、黒潮がもたらす温暖多雨な気候は豊かな植生を育むと同時に、洪水など水害も多発させる。それでも先人たちは、伝承、地名、石碑などで教訓を後世に残しながら、海とともに暮らし続けてきた。

人間活動が大きく影響を与えているとされる気候変動や、食料など様々な資源の不足、生物多様性の低下、自然災害の頻発など、地球規模の課題をいくつも抱える現代。地球の表面積の七割を占め、地球システムの基幹とも言える役割を担っている海のことをより理解し、利用の仕方を見直していくことが、持続可能な社会を築いていく上で重要だ。土佐清水を訪れる人々は、変動帯という変化の激しい土地における海とともにある暮らしを楽しみながら体感して、海との付き合い方を考える第一歩を踏み出すようになるに違いない。

郷土学習資料（４）　　－鼻前廻船商人たちの動向（その２）－

市史編さん室　田村　公利

（３）石造物の銘文から見た「大浜及び中浜袋屋」の系譜

袋屋初代は大浜に居住し、中浜は隠居屋で初代の死後、分家子孫がこれを継いだ。「中浜に袋屋の壮大な隠居屋敷があった」との伝説があることから、大浜本家と中浜隠居屋を一族が代々継承していったものと推測される。

旧中浜小学校南側に広がる長崎台地に袋屋（上原家）墓所が所在し、近世初期から中期にかけて、その繁栄を彷彿させるような立派な墓碑を散見することができる。

現在も中浜に残る堀切道は、「土一升を金一升の交換で掘り割って土木工事した場所」と口伝される⑪。この伝説の袋屋は、部分的にその片鱗が見え隠れしてはいるが、「幻の袋屋」と旧『土佐清水市史上巻』で記されているように、その実態は謎が多い。今回は前 21 号に続き、中浜・長崎台地に所在する袋屋墓所の銘文をたどることによりその実態を探っていくこととする。

現在休校中の中浜小学校の南側の海岸段丘面・長崎大地には、袋屋一族の墓碑が集積されている。中でも、「袋屋彦左衛門墓碑」や「彦左衛門子息・九郎衛門建立の供養塔（高さが約 2.7m・花崗岩製石造物）」は規模が大きく、その繁栄ぶりを彷彿させる。

これらの石造物を基にして銘文をたどると、上原彦左衛門（元禄二年没・1689）・九郎兵衛（元禄十二年没・1699）・善之丞（享保十八年没・1733）と続く。また、善之丞の子女に彦市郎（貞享三年～元文三年・1686～1738）・彦九郎・彦三郎・おきよ（天和元年～元禄十三年・1681～1700）がおり、彦市郎の子息が二代目九郎兵衛（安永八年没・1779）と推測される。

善之丞の長男である彦市郎は、「享保十九年（1734）寅年　六月吉日」の銘で一族の介市、与市衛門等とともに、紀州国印南浦住・次郎右衛門ほか 4 人、土佐国宇佐浦住・太平ほか 6 人と大浜浦住吉神社に石塔を寄進した。三男・彦三郎は、享保四年（1719）『金剛福寺奉加帳』で大浜浦庄屋として氏名が記されている。このことから中浜浦袋屋から大浜浦袋屋に養子に入ったものと推測される⑫。

「おきよ」は、善之丞の長女であり、養老浦を落札した九郎兵衛の孫娘である。その墓碑は、袋屋墓所の中でも一際贅を尽くした花崗岩製の石造物で下関から取り寄せられた。厨子式の構造になっており、表面に蓮花を刻んでいる。劣化が進行して保存状態は悪い。もしかすると、後世に盗掘等の被害にあって、それが原因で劣化が進んだ可能性もある。

彼女の父・善之丞は、前妻「おきん」と死別し、再婚している（後妻「福」）。彼には 7 人の子どもがいるが、「おきよ」は長女であり、長男彦市郎より 5 歳年上の姉であった。

彼女の早世について次のようなエピソードが旧『土佐清水市史上巻』に記述されている。土佐藩主が袋屋の屋敷を訪問し、彼女が給仕を任された。そのとき緊張のあま

りオナラをしてしまうという粗相があった。このことを苦にして彼女は自害してしまったという話である⑬。これには明確な根拠もなく、あくまでも一つの伝説に過ぎない。理由はおそらく別にあると思われる。

理由はともあれ、娘を不憫に思う父・善之丞は、供養のため、墓地で７日間も芝居を行わせて、浦人に見物させたと伝えられる。いつの時代も親子の情は不変であり、父親の亡き愛娘に対する深い愛情を感じずにはいられない。

（４）石造物の銘文から見た松尾袋屋の系譜

松尾袋屋は、袋屋本家（大浜浦）徳四郎から暖簾分けし、伊佐から松尾までの酒造販売権を持っていた。この一族の墓所は、松尾沖台にある共同墓地の一角に所在する。

ここには、花崗岩製・厨子型開閉式の墓碑、砂岩製の規模の大きい墓碑が並んでいる。中でも「松尾袋屋当主・三代目上原清右衛門（寛政六年～文久元年・1794～1861）」の墓碑は、黄土色で光沢にある砂岩製の規模の大きな墓碑であり、松尾袋屋の全盛を思わせる。中央に没年号・戒名・没月日、左面に氏名・享年・建立者名、裏面には故人の友人であった当時金剛福寺住職月暁による漢文の追悼文が刻まれている。

その概要は、「清右衛門は、呂翁と号し、仁義に厚く、人の悪口を言わず、歌を好む善人である。松尾に生まれ、松尾で逝去した。先祖は毛利氏に仕え、六代目以降、この地に移り住み、酒屋を営み繁盛した。」という主旨である。

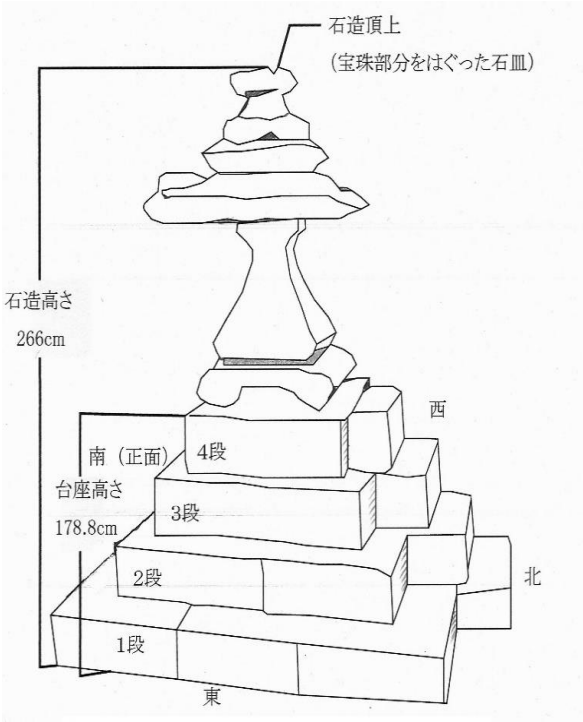
追悼文を書いた月暁は、大和国で密教を研学し、土佐国に帰り、長楽寺（高知市長浜）・永国寺（高知城下）・国分寺（南国市）の住職を経歴し、金剛福寺の住職に就任し、ここで遷化（逝去すること）している。時の藩主山内容堂にもたびたび酒宴に招かれる関係であり、土佐国において著名な高僧として認知されていた。一方、上原清右衛門は、松尾浦を実質的に仕切り、鼻前を代表する商人であり、日頃から交流があったと思われる。ちなみに、月暁自身も清右衛門に追悼文を贈った翌年の文久二年（1862）に遷化している。

袋屋（上原）清右衛門が関わった石造物として「松尾金毘羅宮灯明台」がある（図２参照）。この灯明台は、昭和四十七年（1972）に土佐清水市指定文化財として登録された⑭。安政七年（1860）三月に松尾浦集落で活躍していた廻船商人とその一族たちにより寄進・建立された。松尾金毘羅宮灯明台は、石質から見て恐らく竜串から松崎周辺で産出したと思われる砂岩製であり、地元では「三崎石」と呼ばれている。塚地村石工の太平と弥蔵（井上弥蔵春市）、三崎浦石工・宮崎林右エ門等の名前が彫り込ま

れ、彼らによって加工された石造物とみられる。塚地村は現在の土佐市に位置し、『土佐州郡志』に「里人多石工」と記され、ここは石材加工が盛んな地域であった。

また、宮崎林右エ門は、もともと窪川に在住していたが、三崎浦に移住したと伝えられる⑮。子・友三郎も石工であり、旧三崎川にかけられていた「十字橋震災碑」は、彼ら親子が作製した石造物である。

金毘羅宮灯明台は、松尾集落を中心に鼻前一帯に勢力を持った廻船商人たちによって共同で建立された。石造頂上・宝珠部分の石材をはぐると、石皿のような構造となっており、鉢形の油溜まりがある。そこに油を注ぎ、木片を差し込むことにより、明かりを灯した。電灯のない時代に、灯台の役割を担っていたのである。



註

⑪中山　進「五　以南漁民史」(『土佐清水市史上巻』土佐清水市、1980 年、753～1025 頁)。

⑫田村公利「近世土佐国西南部における鼻前廻船商人の足跡―袋屋関連の石造物及び過去帳等から見た一考察―」(『西南四国歴史文化論叢よど第 15 号』西南四国歴史文化研究会、2014 年、29～48 頁)

⑬⑪に同じ。844～845 頁。

⑭東近伸・問可勲・谷本良信・富田無事生・田村公利『土佐清水市の指定文化財』土佐清水市教育委員会、2017 年、31 頁。

⑮小松勝記『歴史探訪　南海地震の碑を訪ねて　石碑・古文書に残る津浪の恐怖』毎日新聞高知支局、2002 年、126 頁。

【編集後記】

足摺宇和海国立公園は昭和 47 年に指定された。先日、国立公園＊ジオパーク推進課・土井恵治専門員にハチの巣状に穴の開いた岩について、ご教示をいただく機会があった。波しぶきが岩にかかり、その塩分が付着し、長い時間をかけて岩を侵食してできるようで、この現象を「タフォニ」と呼ぶそうだ。竜串にある大小の岩の自然美は、本当に見応えがある。

竜串の景勝・奇岩観光は、いつ頃から行われていたのだろう。文献をあたると、安政 5 年(1858)3 月 18 日、元土佐藩士で俳人である防意軒半開(俳号)が友人とともに幡多郡を巡見したとき竜串を訪れている。今から 164 年前のことである。

「…又浜辺に出、磯の岩ことように波にすれ美しき小砂珊瑚砂もあり桜の浜と云。花と散りし桜の浜や貝拾。半開」(『幡多郡紀行』) と竜串や桜浜の景観の美しさを詠んでいる。164 年前に防意軒半開の心を動かした竜串の景観美は今も私たちの心をとらえて離さない。